

1997 年 7 月

時々、ぼんやりしてしまうことがある。周りで起きていることや、自分がやっていることに精神を集中するのが難しい。

最近はますますひどくなっている。朝起きた瞬間から、何かよくないことが起こるのではないかという予感に打ちのめされることもある。うまく呼吸ができず、手足が冷たい。頭痛がする。

日の出から日没まで、自分がやっていることはすべて、このよくないことを遠ざけるためのものだという気がしている。日を追うごとに、やることは多くなっていく。ひどく疲れる。何一つとして満足にできない。

いつも見られているような気がする。

見られるのは大嫌いだ。

プロローグ

エミールは、自分の管轄するスラムの子どもたちの後を追っていた。真昼の太陽のもとで息切れをしながら、立ち止まることなくシャツの立襟をゆるめる。

子どもたちが、興奮して上ずった声で彼を急かす。

「もうそんなに遠くないよ、エミール神父！」

「こっちだよ、この道！」

「あと少し！」

一歩進むごとに恐怖が増していく。口の中は泥を舐めたようにザラザラとし、錆びた鉄の味がした。

周囲のゴミの海から漂ってくる悪臭は強烈だった。昨晚の雨と照りつける日差しのせいで、ゴミ処分場には湯気が立ち込めている。彼らの周りやその上空に漂う濡れた紙と腐敗物と糞尿の臭いが混じり合った蒸気が、熱を帯びてゆっくりと上っていく。

彼は心の中でつぶやいた。—いつか慣れると思っていたが、そうはならなかった。私がこれに慣れることは決してないだろう。—

ついに彼らは直径 1.5m ほどの小さな空間にたどり着いた。ゴミが取り払われ、その下の堆肥のような古い層が顔をのぞかせている。

「あそこ」子どもの1人が指をさした。

エミールは、その痩せた人差し指で示された方向を見る前から、空気中を漂うゴミの腐敗臭の中に、何か別の腐敗物から発せられる臭いを嗅ぎ取っていた。

小さく痩せた青白い手が、ゴミの下から突き出している。

「マリア様……」彼は小声でそうつぶやき、子どもたちの方を向いた。「すぐに長い棒を持ってきてくれ」

3人の子どものが進み出て、普段ゴミを漁るときに使っている、先が曲がった細い棒を差し出した。彼はそのうちの1本を手に取り、見つけたものの方へ恐る恐る近づいた。

取りかかろうとした瞬間、ゆっくりと揺らめく灰色の恐怖のもやを、子どもたちに対する心配が、光のように貫いた。彼は手を下ろし、子どもたちの方を向くと、ここを立ち去るように言った。

「嫌だよ、エミール神父」まず初めに1人がそう言い、その後大勢が続いた。「僕たちも一緒にいるよ」彼らの顔には、とても大人びた、ある種の静かな決意と共感が見てとれ、エミールを驚かせた。

彼は密かにこの同伴を喜んだ。そしてそれ以上は繰り返すことなく、作業に取りかかった。

—よし、やってやろうじゃないか。—

大きなゴミの塊を次々と掘り返していくと、それは徐々に姿を現した。彼には何なのかわかっていたが、それを覆っている廃棄物がほとんどなくなるまで、目をやろうとはしなかった。

全てが終わると、子どもの全身が現れた。

8歳から10歳の少年に見えるが、エミールには正確な年齢を判断するのは難しかった。というのも、この辺りの子どもたちは栄養失調と病気のせいで、14歳や15歳になっても小さいまま、とても小さいままなのだ。

少年の顔は泥に突っ伏しており、何一つ身に着けていなかった。

その臭いは、今や周囲を漂う腐敗臭の中でもひととき際立っていた。ぞっとするような悪臭が、重くのしかかるように立ち込めている。

丸々とした輝くブルーブラックのビーズのような蠅が、少年の周りをブンブンと執拗に飛んでいる。

エミールには、その後頭部や背中に何の傷や傷跡も確認できなかった。死体に触れるのを恐れて、棒の先端を少年の胸の下に差し入れ、梃子のように使っ

て身体を仰向けにする。死体の重みで、あやうく棒が2つに折れるところだった。

突然、子どもたちの間に奇妙な沈黙が訪れた。それだけでなく、エミールを囲む世界のすべてが沈黙したようだった。近所から聞こえていた音も、ハイウェイを通る車の音も、耳の中で奇妙な低い轟となって消えていった。

最初、仰向けになった子どもの身体は動いているように見えた。それが体内にいる何千もの蛆によるものだと神父が気づくまで、数秒かかった。胸と腹に大きく開いた傷——いや、穴——があった。

心臓が取り除かれ、他の内臓も摘出されている。性器もなくなっていた。

エミールは少年の顔を見た。—お願いします、神よ、顔を見れば、これがかつては人間のものであったとわかりますように。—しかし次の数秒で、少年の顔がないことがわかった。そこには剥ぎ取られた跡があり、ゼリー状の眼球と筋肉のあちこちから突き出した骨が、ひどい状態で残されていた。

何がなくなっていて何が残っているのかを見分けるのは難しかった。

午後の激しい試合でついたのであろう紫がかったかさぶたが、その両膝にあった。

突然、魔法が解けたかのように、子どもたちを恐怖が襲い、彼らはまるでヤギのように飛び跳ねてその場を離れ、叫び声をあげながらゴミ山から逃げていった。

エミールは死体からよろよろと遠ざかり、胃が空っぽになるまで嘔吐した。しかしそれでもまだ足りず、気持ち悪さからさらに吐こうと虚しい努力をし続けた。

目から涙が滝のように流れていく。子どもたちの中で年上の3人が、まだそばにいるのが見えた。彼らはエミールに近づくと、何も言わずにその手を取り、静かに、優しく、ゴミ山から彼を連れ出した。

※本原稿は翻訳作業中のもので、完成版とは異なる部分もございます。あらかじめご了承ください。